

夏休みデビュー？

「ひばりちゃんったら『夏休みだから旅行に行くの』なんてすつとほけた言い訳するのでございますわよっ！ 保育園が24H7Dなんて常識の当然なのですわ」

これでもかと降り注ぐ日差しの中、二人は青空を仰いだ。

「すずめの未婚子なしを馬鹿にしたんじゃないの？」

「はいい？ ひばりちゃんはそんなお方じゃありません。だいたいの、私のようなピッチピチのOLに結婚や子どもなんて似合いませんわ。尤も、墓すら萎れた豪徳寺課長には——」

「気にして言うことを言うな。でも、すずめもその乗りじゃやばいわよ？ ピッチピチとかOLとかいつの言葉なんだか……」

「そ、それを言われますとちよつと痛いですが……」

ここは秋葉原の某オフィスビル、と言えば聞こえはよいが、老朽化の進んだ低層ビルの屋上だ。

世界はあの頃と、十二年前とそう変わっていないのかも知れない。しかし彼女たちの周りでは確実に十二年が経った。こうして緑が溢れくつろげる屋上なんて当時はなかった。空を見上げれば、周囲を囲むのが高層オフィスビルなんて、当時は秋葉原では想像もつかなかった。

「だいたい、どれだけ会ってないって言うのよ？」

「三週間ですわ、三週間もっ！」

「それって長いわけ？」

じゅんの問いにすずめは目をまん丸くすると、拳を振り上げ力説で応ずる。

「長い、長すぎますっ！ 毎週ひばりちゃんと会うことを楽しみにしている私ですので、今月に入って一度もひばりちゃんの顔を見ていませんのっ！」

丁寧に箸を置いてから。細かいところで育ちのよさを見せるすずめだが、その興奮ぶりはお嬢様をやめた理由がわかりそうなほどだ。

一方のじゅんはすっかり呆れ顔。すずめをよく知っている彼女も、「ひばり愛」がまさかこれほどまでとは思っていないかった。

「ま、大人になればいろいろあるのよ。子どもの頃にや想像できないことが、ね」

「例えばなんですか？」

「すずめが平凡な会社員になるとか？」

「ちゅーん、それは確かに……」

すずめは改めてお弁当を完食し、蓋を閉じる。

隣のじゅんはコンビニのサンドイッチをビビッドな赤色で縁取られた口に放り込む。

「しかもお手製のお弁当。当時のすずめに見せてやったら、悪い冗談だって腹抱えて笑うんじゃない？」

「ひ、否定はできませんでございますわ。で、でも、ひばりちゃんはず——」

「普通に考えて、男ができた」

じゅんはあっさり言い放ち、スツと立ち上がる。

「いい天気ねー。デート日和だわ」

火に油を注ぎながら背伸びをすると、火中の栗が飛んできた。

「行かず後家には何もわかりませんがでございますのっ！」

怒り心頭と言った強い歩みで、すずめは屋内へと去ってしまう。残されたじゅんの溜息は、やはりあの頃とは違っていた。

「はあ、うちの課の若きエースが乱調ねえ……」

じゅんは心配そうに彼女の去ったあとを見つめた。

そして始業のチャイムとともに、豪徳寺課長はキリッと屋内への扉を開けた。

*

窓越しに見る繁華街は、待ち合わせの若者で溢れていた。

少なくとも、カフェラテ片手のじゅんにはそう見えていた。

「夏休み最後に女の子を卒業だあ？ アホなこと言ってるんじゃないわよ」

さすがに三十代も半ばで独り身一筋というのは応えるらしく、独りごちるのはいつものこと。しかし。

「ま、今日の私はあなたたちに負けないぐらいに楽しいもんねー」
今日の彼女は少し違うらしい。

飲んでいるコーヒーもいつものブラックではない。ちょっとおしゃれのつもりだ。さらにはガムシロップまで入れている。

「甘いわねえ。ふふふ……」

三十時も半ばで独り身一筋が応えて壊れたか。とでも言われそうな、本人は優雅だと思っている寒気のしそうな笑みは、ランドマークとして拔群だったらしい。窓越しの女性が彼女を発見すると、早足で店内へと入ってきた。

「済みません、待たせてしまいましたか？」

「全然待ってないわ。まだ待ち合わせの二十分前だもん」

「先にお待ちしているつもりだったのですが……」

「ふふっ、それは私も……って、すずめ、何よその仕事みたいな話し方っ！」

「えっ？ 違うんですか？」

「違います……」

じゅんの前に現れたのは、隙なしにスーツで決めたすずめである。

「デートしようって言ったじゃない」

「オフィスで誘われて、まさか本当にデートなんて思いませんでしたわっ」

「ま、まあ、そうよねえ……。はあ……」

じゅんは想定外の状況に落胆しきりだが、すずめも同様だった。「だいたい、仕事でなければ来せんわ。私にはひばりちゃんからの電話を待つという超絶とびきり大切な予定が——」

「その必要はないわ」

「は？」

「その必要はないって言ったの」

席に着くことも忘れ、己の予定を力説するすずめを、じゅんは事もなげに制した。

「はいい？ 私の予定がどうでもいいなんて——」

「そうじゃなくて。ひばりの予定はわかるから」

「何を言ってるんでございますの？ それがわかるならちゅーんと飛んでいって」

「ほら、あそこにいるの、ひばりよ？」

大騒ぎするすずめに示された、指差の先には。

「ちゅん、本当の本当でございますわ」

じゅんの言った通りに、ひばりがいた。

おかげで二人の机の周囲は一気に氷点下だ。そう、緊張感を増したのだ。その理由は紛れもなく、ひばりだ。

「あ、あの、じゅ、じゅじゅん？」

「何？」

「ひひ、ひば、ひばりちゃんの隣に……」

「男がいるねえ」

「ななななななんですってええええーっ！」

窓越しに見る繁華街は、待ち合わせの若者で溢れていた。

少なくとも、左手をぶんぶん振って男を呼び寄せたひばりは、

そんな若者に見えた。

「女友達ってそんなもんよ？ みやまも——」

「行きますわよ」

「は？」

「行きますわよ、尾行でございませすわ！」

「備考？ 何が？」

「尾行！ 後をつけるのですわ！」

「あーあー、わかつてたけど……」

じゅんは渋い反応を示しつつも、腕を掴まれては逆らえない。

握りつばなしたったカフェラテを煽ると、彼女に引つ張られる

ままに席を立った。

「甘いわあ……」

再び、悪寒を呼ぶ笑みを見せながら。

*

「信じられませんか……。この程度のものに行列だなんて……」

「カップルなら待ち時間も楽しいんだよ。ま、私はお断りだけど

……」

店構えを見たときは、二人ともデートコースなんだなあと高揚

もしたが。

店に入ったときにはすでにげんなり。夏の炎天下の中、三十分も待たされては当然という顔だったが。

「うあー、おいしいよー」

ひばりは大喜びでケーキを頬張ってる。大胆にも至近で観察しながら、二人はまた溜息をつく。

「ひばりと来たら元気になれた？」

「ちゅーん、率直にもうしまして無理でございませすわ。この程度

ならうちのパティシエールに作らせた方が——」

すずめは己の発言にふと気付いて、口を塞いだ。

「もう『うちの』じゃないもんねえ？」

「わ、わかつてませすわっ」

何かをごまかすように、すずめは小さく目を逸らして、黙々とケーキを食べる。

実家については彼女が普段、触れたがらない話。しかしじゅんは、お構いになしに続けた。

「それこそパティシエールも他の人たちも、親御さんだって、戻

ってこいつて言ってるんでしょ？」

「ええ。でも、一人でがんばりたいのですわ……」

「なら、誰が何と言おうとがんばったらいいわ。私は好きよ、そういうの。だからご褒美」

じゅんはケーキを小さく切り分けると、フォークをスッと刺し、すずめに差し出す。

「あーん」

「あーん、つてやるとでも思ったのでございませすかいつ！ そんな小つ恥ずかしいこと——」

「えー、やろうよー。ひばりたちもやってるわよー？」

「ちゅん？」

慌てて振り向いたすずめに見えたのは、腕を伸ばすひばり。後ろ姿だが、あれは明らかに腕を伸ばし、フォークを――

「パクリとしゃがりましたねえええっ！ な、な、ななてことしていただきますのおお腐れ野郎がああああっ！」

デート中の恋人という地位を確固たるものにした男に対し、すずめは悲鳴を上げた。ただし小声で。

「それでも見守るのは、偉いわ」

すずめが振り向いたとき、差し出されたのはハンカチだった。

「ありがとうございますです。あらほれま、可愛いハンカチですわね？」

「ま、まあ、デートだから、その、ね……」

「ちゅちゅーんっ！ ひばりちゃんもきつと、可愛いハンカチを……」

会話を頬を赤らめる二人は端からどう見えるのだろうか。お互いの考えることが全く違っていることがわからなければ、店内に似つかわしい二人に見えるかも知れない。

お次は映画館。

これまた定番のデートコースと思われたのは、チケットを買うまでだ。

「これで、あつてるの……？」

「間違いございませんわっ。私がつちりこつそり見た結果、この『ザ・ブラッド・オブ・ゾンビ』完璧当たりですます」

「い、いや、すずめを疑うわけじゃないのよ？ でも、これをデ

ートで……」

「観ないと思うですます……」

実際にデートをしたことのない二人の経験値では推し量れないことがあるのだろうか、互いにこつそり思いながら、スクリーンのある部屋へ。

上映前でまだ明るく、その上客は少なく、簡単にひばりたちの姿が確認できた。

「ホントにいますでございませわ……」

「そ、そうね……」

「しかも何やら楽しそうに話してくれちゃってますわ……」

「全然知らないんだけど、意外とおもしろい映画なのかもね？」

「ちよつと感覚がずれて素敵なひばりちゃん的には、そうなのかも知れませんが……」

映画は文字通りに凄惨なものであった。タイトルからの想像を何一つ裏切らない。

まずはドロドロと崩れる肉。

「ちよ、ちよつと、寝ないでくださいなっ」

「寝てないわよつ。寝られるわけきゃっ！ もうやだ……」

次々切り飛ばされる手足に首。扶られる目玉に内臓。

「ちゅん！ きゅ急に触らないでくださいませですわ」

「ごめん、でも、手、握っててもいい？」

「全然断然ノープロブレムですから私もぎゅつとしちゃいますですす」

そして延々と響く悲鳴が呼ぶのは止まらない血しぶき。

「なな何ともうああ、骨までえええ」

「あ、あのさ、私、本当に気持ち悪い……。お手洗い行ってもい

い？」

「しし仕方がありませんですわ、私も一緒に行つて差し上げますの」

二人は同時に席を立つと、絡み合わせた腕が苦になることもなく、息の合った早足でスクリーンから離れる。

お手洗いに辿り着くと、当然のように明るかった。二人はその当然を何よりもありがたく感じながら、後ろの壁に、横の互いに寄りかかる。

「あの二人は平気でございますの？」

「多分……。さもなくば選ばないと思うわ……」

さすがに言葉もなく、二人は、ぼーっとそこに突っ立っている。数分して、覇気の失った声がようやくと出てきた。

「こうして腕を組んで寄り添つて、カップル向きと言えなくもありませんわ……」

「そうか、お化粧屋敷と同じね。ははは……」

結局二人は、映画が終わるまでお手洗いに。

時計を見て出て行くと、果たしてそこでは、ジョークが現実になつていた。

「すずめの言う通りね、つてえ痛い、痛いって！ そんなに強く掴まないでっ！」

樂しげに腕を組むひばりたち。

一方のこちらは、似たような格好をしながらも樂しげな館は皆無である。

「あの野郎、足首ぶつた切つて目玉も内臓もくりぬいてやるですわっ！」

*

すずめにはもちろん諦める気などなく、引き続きひばりたちのデートコースを追っている。

「ちよつと早いけど、そろそろ夕食かしらね？」

「あの映画を観たあとの夕食と、パッドセンスもいいところございませわ」

「肉料理は避けて欲しいわね……」

映画ですっかり疲れ切つた二人だったが、すずめはいちやつく二人を見て怒りを露わに早くも回復。じゅんも引つ張られるように、普通におしゃべりをする程度に戻ってきた。

すずめの真つ直ぐさが素敵だなと思うじゅんには、彼女が真つ直ぐ何を目指しているのが見えなくなっているのだらう。

「ちゅちゅん？ ま、まさか……」

「あ、いつの間に。食事つて感じではないわね……」

繁華街の中にあるながら、この辺は人気が少ない。

本当に人気が少ないわけではないはずだ。ただ、みな、路上にはいないだけ。

「ままままあさか、ひばりちゃんに限つて、ありませんことですわっ」

二人で部屋に入るための場所だから。

たつた一つの、明確な目的のための場所だから。

「嘘、ですわ……」

ひばりたち二人だけが例外になることはなかった。

「もう十分でしょ？ 帰ろう？」

じゅんはラブホテルへと入る二人よりも、すずめの方が心配だ

った。

「ひばりちゃん……」

ぴったりと立ち止まると、目を見開いたままに放心状態。しかしそのままでは終わらないのが彼女だ。

「行きますわよっ！」

「いや、行くってつたって、同じ部屋には入れないわよ？」

「わかってますわっ。少しでも近くに……」

再び涙を浮かべる彼女を、誰が制止できようか。

組んだ腕を解くことなく、すずめはズンズンと歩みを進める。

組まれた腕の感覚が、じゅんをすずめに従わせた。

二人は適当な部屋に入り、揃ってバタリと、背中からベッドに倒れ込む。

「こんなところにいたら余計に——」

「わかってますわ。ひばりちゃんにこの日が来るだろうってことも、わかってましたわ」

「そうね。でも、泣きたいんだよね……」

じゅんはゆっくり上体を起こすと、靴を脱ぎ、ベッドに座り込んだ。

「おいで。一緒にいた方が、少し、楽になるよ？」

腕を広げて招き入れるじゅんに、すずめは氣息そうに近づき、トンと身体を預ける。

「こんなことで私の気持ちは楽になったりしませんわっ」

「ごめん。そうよね」

じゅんはゆっくり、すずめの頭を撫でた。

「うう、私のひばりちゃんが、今頃……」

頭を撫でた気持ちに、不純はなかった。

けれども嘆くすずめの姿が、彼女を変えてしまった。

「そうね。今頃、何してるのかしらね？」

口調が変わったことに気付いたすずめが顔を上げたときには、もう、遅い。

じゅんはすずめの肩に置いた腕を伸ばす。穏やかにベッドに倒れていくのを追うように、彼女はすずめに覆い被さる。

「同じこと、してみようか？」

「は、はい？ な、何を……」

「まずはキス、よね」

雰囲気は飲まれるとはこのことか、すずめは瞳を閉じる。

じゅんの赤い唇は、すずめの無垢な唇に重ねられた。

初体験。

しかしそれが素敵な思い出になるのは、夢見がちな少女漫画の中だけかも知れない。

「きゃーっ！ すずめちゃんとじゅんさんがキスしてるーっ！」

突然降ってきた声に、すずめは目を見開く。じゅんも状態を浮かせて声の主の方を向いた。

「ひ、ひばひばりちゃんっ！」

「どうしてここに……」

哑然とする二人に、聞き覚えのある声が答える。

「私が開けたからのう」

ひばりの後ろから現れたのは、ご老体、泉岳寺シマ福郎だった。

*

「あれから十年以上経った。しかし並みの連中には機動女神アイデッパどころかバタPiの再現もできなかった。わしはなあ、もつと凄いものを見たかったんだよ」

シマ福郎が明かした「ひばりの恋人」は、極めてシンプルだった。「そこで拵えたのがこのアンドロイドだ。かめめの誕生日プレゼントにしようかと思つてなあ、ひばりちゃんにフィールドテストを頼んでたのさ」

男ができたひばりが女友達の優先度を下げた説は見事覆され、今年も暑い八月が終わろうとしている。

彼女たちの周りでは確実に十二年が経った。変わったのは周りだけではない、彼女たちもだ。

「ねえねえすずめちゃん、じゅんさんとはうまく行つてるの？」

「ま、また聞きますの？ そういうことはたまに聞けば結構毛だらけなのですわっ！」

「えー、教えてよー。みんなの中ではすずめちゃんが初めてなんだから、ね？」

彼女たちはまた、来年の夏へと走り出した。

あとがき

あちゃー、こりや寝ずに参加コースだなー。

とゆわけで例によつて当日仕上げとなった本作ですが、いかがでしょ。とか聞くのも憚られます。ごめんなさい、書き出したの昨日の夕方です。

予定を見てこうなることはわかっていたのですが、それでもついつい、申し込んでしまいました。

アキハバラ電脳組がそんなに好きだったかと問われると、何とも言えない感じ？ もちろん毎週楽しみにしていましたし、好きだったんですよ？ でもどつぷりつてわけではなかったかなあと。そう思いながらも「2011年の夏休み」って言われると、抗えないパッションが襲ってきました。そーゆーイベントが開催されると聞いては黙っていられません。そんな私なので、寝てなくてもきつと、イベントを楽しんでいることでしょう。自分のサークルスペースの閑古鳥にまたやつちまったぜとか思いながらね。

あれから十二年つてことで、電脳組の世界も十二年進めて書いてみました。ひばりたちは二十六歳、じゅんは三十四歳ですよ。そりゃ私も年取るわなあ。当時は○学生だった私も、今や……。

何かバラバラと書いてきましたが、まとめる元気もないのでこの辺で。これからレイアウトと印刷なんで許して。そのあと、何とかペーパーを……無理か。

では、去りゆく「2011年の夏休み」に笑顔で手を振って。
またどこかで、お会いしましょう。

二〇一一年八月二十八日、夏休みがなかった夏の終わりに。

夏休みデビュー？

Fukapon

2011年8月28日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2011 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>

